

笑利！求利！

令和7年4月30日
【第1号】

鍵

今日から「校長室通信」を発行します。

これは、生徒の皆さんに向けて、私が日頃から思っていることやお薦めの本について、「学校だより」よりもっと気軽にお話ししたいと思っています。生徒の皆さんからもこれを読んだ感想など聞かせてもらえれば嬉しいです。

さて、第一回目として、私の好きな作家を紹介します。星新一さん（1926～1997）。日本にSFという小説のジャンルを確立させた第一人者です。中でもショートショートと呼ばれる短編小説の名手で、生涯に1000編以上の作品を遺しました。一作品が3～5ページの短さでありながら、見事な伏線と秀逸なオチにハマること請け合いです。

さて、その星新一さんのショートショートに「鍵」（新潮文庫「妄想銀行」所収）という作品があります。



笑顔でいると風邪をひかないということが研究によって証明されているって知っていましたか？意識的に笑顔を作ることで脳が勝手に「楽しい」と思い込み、免疫力がアップし、自律神経も整うんだそうです！

ある日、男が道端で鍵を拾う。見たこともない美しい鍵…。男は何の鍵だろうと不思議に思い、近くの家のドアの鍵穴に挿し込んでみるが、もちろん開くわけもない。男はこの鍵が何の鍵か、どうしても確かめたくなくなった。手あたり次第、鍵穴を見付ければ、その鍵を差し込んでみる。やがて、それが何の鍵かを探し求めることが、彼の生きる目的そのものとなった。彼は、日本中やがて世界中を旅して、これに合う鍵穴を求め、多くの話を聞き、多くの経験をした。

やがて月日は流れ、彼は年老い、身体を動かすことも困難になった。ベッドに寝たきりになった彼は、鍵屋に頼んで、自分の部屋に、その鍵に合う錠前を特注で作ってもらった。

カチッ。鍵が開きドアが開いた。これでもう思い残すことはないと思った彼の目の前に、まばゆい光とともにこの世のものとは思えない美しい女性が現れた。彼女は言った。「私は幸運の女神です。あなたはこの鍵を開くことができました。あなたの欲しいものを言ってください。何でもかなえましょう」。男はゆっくりと言った。「私が欲しいものは思い出だけだ。そして、それはもう持っている…。」そう言って男はゆっくりと目を閉じた…。

この物語、まるで人生そのものを表現しているようで大好きなんです。一つのことに興味関心を抱き、ただひたすら「それがなにものか」を追い続ける生き方。それが他人にとって価値があるかどうかなどは関係なく、ただ自分の探究心に素直に向き合っていく姿勢。ゴールにたどり着けるかどうかよりも、ゴールに向かっていった過程が、何物にも代えがたい価値となる…。

我々はともすると、何かを始める前からゴールにたどり着けるかどうかばかりを気にして、始める理由よりも「できない言い訳」を先に考えてしまう傾向があるように思えます。しかし、周りがなんと言おうと、自分が「好きなものは好き!」、「やりたいものはやりたい!」という素直な気持ちをもつことが、人生における最高の思い出を創造する第一歩となるような気がします。